

一般入学試験（前期日程：1月27日）

全学部

英語

(P.1)

【出題の意図・ねらい】

①は動詞句を中心に、ほとんど同じ意味の語句を選択する形式の熟語問題です。基礎的な熟語からやや難易度の高い問題までであるので、熟語の幅広い応用範囲を広げる設問となっています。②は基本的な文法および語法を問う問題です。ここも基本的な問題が中心ですので、受験者の基礎力がしっかり身につけているかを確認する問題群です。③は単語の並び替えによる英作文の問題です。正確な英文の構成力が問われますので、英語の実力が最も試される、英語の総合力を測る問題です。④は図表が示す数値を英文で説明した文章に適語補充する問題です。図表が示す内容を正確に読みとれるかどうかにかかっているので、それが解答を導き出すうえでの前提条件となります。⑤は、おいしいサンドイッチの作り方のレシピ（調理法）の文章を並べ替える整序問題です。サンドイッチを作る手順を想像してみることが、解答を導く鍵になっています。⑥は、今後新しく開発されそうな情報機器の話題を取り上げた会話の文章です。会話体の表現に慣れ親しんでいるかが、ポイントになります。日常生活の必需品を説明する英語表現の参考例として出題しています。⑦は長文読解問題です。内容は、ココアの生産からチョコレートが作られるようになった歴史が簡潔にまとめられ、後半ではヴァレンタイン・デーとホワイト・デーの由来が語られています。設問は多岐にわたっています。文法問題、発音問題、英文和訳問題、そして内容把握問題が2問といった、総合力を試す問題です。

【採点結果からの感想】

全体的に正答率は低い結果になりました。多種多様な設問のため、総合的な英語の力が必要とされるためかもしれません。低い正答率の問題の順番に並べてみますと、発音問題、動詞句問題、熟語問題、文法問題ということになります。発音問題は全40問中の1問にすぎませんが、正答率があまりに低いので驚きでした。これだけコミュニケーションといわれている時代ですから、個々の単語を正確に発音できることが、将来的な英語の力となるはずですが。

【これからの学習の指針】

問題の形式に添って自分の実力を測定してみることで、特に①および②のような動詞句や熟語を中心にした問題は、習熟することで確実に点数を伸ばせることができるので、ここでしっかりと正答を導き出せるようにしておくことが一番の近道です。語学は毎日の積み重ねしかありません。コツコツと努力することしかないので、そういう意味では努力したぶんだけ必ず報われるものです。自分の好きな分野のものを、やさしい英語で読むことも息抜きとして必要かもしれません。そして世界で起こっていることに興味を持つ意味でも、図書館に常備している学生向きの英字新聞もおすすめです。がんばってください。

国語

(P.6)

【出題の意図・ねらい】

本年の現代文は、言葉、情念、時代という3つのテーマからなっています。問題㉑は、「ことわざ」を手掛かりに経験と思考の体系化を考える論説、問題㉒はアラブの女性自爆テロ事件にかかわる時事的で情念的なエッセイ、および問題㉓は不況が続く中で大震災に見舞われた日本の今後のあり方を考える議論、からの出題となりました。

問題㉑の問三は、適切なことわざを選ばせるものですが、普段の生活の中でどれ程ことわざに関心があるかが問われています。問四は、ことわざとは何かという本質を問う問題です。（外山滋比古『思考の整理学』ちくま文庫より「ことわざの世界」）

問題㉒は、文法的な出題が多いことが特徴です。問一、問二は接続詞と固有名詞の数、問五は主語探し、また問三は事件の時間的継起を読み解く問題となっています。なお、本文中に出てくる句が自由律の短歌であり、その下に書いてある「英」は作者の名前であることが理解できなければいけません。（阿久津英「街上游歩（23）」西日本新聞 2003年10月15日）

問題㉓の問一は漢字の読みの問題ですが、問題㉑の問一とは出題形式が異なっています。問二は、本文中からは解答が出てきませんが、時事的な常識として知っていて当然でしょう。問六と問七は、大意をつかみ、それをタイトル化する問題となっています。（五木寛之『下山の思想』幻冬舎新書より「新しい物差しをもって」）

古文は、『宇治拾遺物語』（新日本古典文学大系）からの出題で、不思議と滑稽と教訓を兼ね備えた面白い話です。昔、清滝川の奥に柴の庵を作って暮らしている僧侶がいました。水がほしいときには水瓶を飛ばして（いわばリモコンで）汲みに行かせて得意になっていましたが、ある時まったく同じように水瓶が水を汲んで飛んでいくのを見かけました。自分と同じ不思議を行っているのを妬ましく思い、誰の仕業かと水上にたどっていくと、たいそう立派な聖が優雅に暮らしていました。この聖を試みようとして庵に火を放つが、かえって自分に火が付いて大騒ぎになりますが、そこの聖によって火は消されました。そこで「下の聖」は「上の聖」に弟子入りを申し出るようになります。作者は、「下の聖」の慢心を憎んだ仏が、それよりうわ手の聖を出現させて驕慢の心をたしなめたのだ、というのです。

問一と問三は文法問題ですが、そのほかは文言の理由や現代語訳を問う問題で、注意深くニュアンスを吟味していけば解ける問題でしょう。

【採点結果からの感想】

合格者の平均点は60.1点、古文選択者は64.6点でした。最高点は89点と87点、最低点は32点と33点でした。受験者の平均点は54.5点と59.8点（古文選択者）でした。

難問（正答率30%以下）は解答番号10、14、23、25、29、31でした。やさしい問題（80%以上）は2、12、19、20、28でした。古文は解答番号25が若干難しい（正答率40%台）ものの他は大体できていました。

【これからの学習の指針】

毎年、言うことですが、国語の成績を急激によくすることは困難です。ともかく日頃の言語感覚を磨き、話し、聞き、読み、そして書くという機会を意識的に吟味していくしかありません。そのようなことの積み重ねにより、おのずから国語力は伸びていくものだと思います。特に多様な文章を読む、問題意識をもって読む、気持ちを込めて読む、繰り返し読むということが必要です。声に出して読むことも必要でしょう。また、時事的な関心を持ち、思考の幅を広げることも求められるでしょう。そして、著者の考えを丁寧に読み解き、自分の言葉で説明してみることが有効でしょう。できたら友達や家族などとディスカッションの機会を持つといいでしょう。そうした、話し、聞くという行動を通じて言葉の意味や用法なども自然と習得できるでしょう。ただし、漢字や語句などの基礎知識については意識的に覚えるしかありません。

他方、古文に関しては文法や古語の基礎知識は知らなければなりません。しかし、古いとはいえ日本語ですから、語感やリズムから何となくわかるようなところもあります。現代に引き写して自分の言葉で考えてみるといいでしょう。とはいえ、現代文とは似て非なるところもありますから注意が必要でしょう。結局、基礎知識の学習の上に、昔の人の気持ちを理解しようという努力が必要です。

るだけの実践力と、ケアレスミスをせず時間内に問題を解き終えるだけの計算力も求められます。これらの力を身につけるためには、数多くの練習問題にあたることと、自分の手で計算する労力をいとわないことです。「学問に王道なし」と言いますが、地道な問題演習こそが合格に必要な数学力を習得するための最良にして唯一の方法です。

特に文系学部を志望する受験生にとって、数学は敬遠する人が多い科目と言われています。しかし、地道な努力が着実に得点に結びつく科目でもあります。努力すれば必ず報われることを信じて、日々の勉強に勤しんでもらえればと思います。

数学 (I・A)

(P.13)

【出題の意図・ねらい】

①は、数と式、方程式、二次関数、平面図形に関する問題で構成されています。問5の平面図形に関する問題は、面積比から内分点の比が求まることに気がつけばすぐに解答できるのですが、そこに気がつかないと少々厄介です。②は図形と計量に関する問題です。自分で図形を書いた上で、正弦定理・余弦定理を使って設問通りに計算していけば解答できます。③は順列の計算で、5枚のカードを使って5桁の数字を作る問題です。問1は5枚のうちの2枚の数字が重複しているケースを、問2は5枚のうちの1枚に0のカードが含まれるケースをそれぞれ扱っています。

【採点結果からの感想】

受験生の得点分布を見ると、60点以上の層と40点以下の層で分布にばらつきが見られました。これは、基礎的な内容をしっかり理解できている受験生とそうでない受験生の間で、明暗がはっきり分かれていることを意味します。①の問5で出された比に関する問題、②の問2で出された外接円の半径の和の範囲を求める問題、③の問1と問2のそれぞれ最後で出された問題は、受験生にとって相当手強かったようで、他の問題と比べて正答率がかばかしくありませんでした。しかし、その他の問題については基礎知識と正確な計算力があれば、十分に正答できる問題です。従って、基礎的な問題を確実に正答できる力が身につけていけば、他の受験生に十分な差をつけることが可能な試験であったと言えるでしょう。

【これからの学習の指針】

例年、本学で出題される数学の問題の大半は、基礎的な知識があれば正答可能なものとなっています。従って、数学I・Aの教科書の基本内容をしっかり自分のものにしておくことが何より大切です。そして、必要な公式や定理を実際の試験で使え